

<特集>

天邪鬼日記

大辻民樹 <放送作家>

「流行り歌」

令和も二年を迎え、東京では56年振りにオリンピックが開催される。

前のオリンピックは、昭和39年。天邪鬼は4歳。女子バレーの東洋の魔女出沒やら、重量挙げの三宅、体操の遠藤と美しきチャフラフスカ、マラソンの円谷幸吉、柔道のヘーシンク…、いろいろあったクライマックスの映像が頭に浮かぶが、どうもそれは後からのVTRによる刷り込み、または後のオリンピックとの混同であるかもしれない。何しろ、4歳だったのだ。だが、ただ一つ、これだけはあの時に間違いないと鮮明に覚えているシーンがある。

場所は、私の生まれた関西の田舎村、当時農業一筋だった本家の座敷。15畳ほどの広さに親戚のおじさんたちが勢揃い、割烹着を付けたお婆さんたちは料理やお酒やらの用意をしながら、一番後ろから立ち見。我ら子供たちは一番前だ。そう、お祭り騒ぎだった。そして、昭和39年10月10日午後1時、壮大なる『オリンピック序曲』とともにその一大体験は始まった。抜けるような青空、色とりどりの国旗、橙色のアンツーカー…、全てが新鮮な驚きだった。「ウオー」、大人たちの驚きの声と、口をポカンと開けたままの子供たち。そう、それが我が一族のカラーテレビ初体験だった。

世は正に高度経済成長の真っ盛り。東京では首都高速が開通、鉄腕アトムに描かれた近未来都市のような光景を生み出し、うちの田舎の田圃の中を夢の超特急ひかり号が駆け抜けた。正に奇跡と呼ばれる復興からの経済成長であった。昭和20年の何もかも失った敗戦からわずか20年、この国は再び一流先進国を目指し、そして有色人種国はじめてのオリンピックを極東の島国で開いたのだ。

カラーテレビもこのオリンピックをきっかけに飛躍的に普及した。関西の片隅で我が一族もその恩恵にあずかったわけだ。とは云え、まだまだ復興途中、開会式を見た後、従兄弟たちと入った風呂は、薪で焚く五右衛門風呂だったし、下水道もなく、田舎ではまだ舗装していない道路も多かった。

あの頃、昭和30年代から40年代、全てに活気があった昭和の黄金時代と今令和の時代、いったい何が一番変わったのであろうか？ 外国人が多い。携帯電話が普及している…。まあ、半世紀以上経っているのだから、いろいろ違いはあるだろう。だが、天邪鬼が注目したのは、音である。

あの頃の街に今の子どもたちがタイムスリップしたら、おそらく仰天するだろう。

とにかく賑やかなのだ。朝は鶏の断末魔のような声で始まり、牛乳屋の配達が瓶をガチャガチャ云わせてやってくる。今、除夜の鐘がウルサイと自粛気味のお寺の鐘も毎日時間ごとにもっと鳴っていた。クルマの数は少なかったろうがその騒音は凄かった。エアコンなんて余程の邸宅しかなかったから、夏は網戸で玄関も開けっ放し、外の音が直接入ってきた。昼下がりともなれば、子どもたちの遊ぶ声。空き地と云う空き地、神社の境内や公園、そしてあまりクルマの通らない道…、街中に子どもたちと彼らの遊ぶ声が満ちていた。ウルサイから幼稚園や保育所の建設に反対する輩などはとんでもない山奥か無人島に行かなければ生きていけなかったろう。

「しげちゃん、アソボ!」、「あ〜とで」子どもたちは玄関も開けず外から友達と声をかけあい、配達にやってきた洗濯屋の軽トラからは大音量のラジオ、豆腐屋はラッパを鳴らし、「竹や竿だけ〜」物干し竿売りや「毎度おなじみちり紙交換でございます。古新聞、古雑誌…」に焼き芋売り、チャルメラ鳴らすラーメン屋、深夜にはコタツのテーブル台をひっくり返しての家庭内麻雀の牌を混ぜる音もよく聞こえてきた。今、中国の人の声が大きいなどと云うが、当時の日本人の声もこれらの雑音に対して話を通さなければならなかったから相当に大きかったと思う。そして…、当時街には唄が流れていた。パチンコ屋から、商店街のスピーカーから、洗濯屋の軽トラのラジオから、喫茶店の有線から絶えず唄が流れていた。殆どが歌謡曲、すなわち流行歌だ。

だから当時の唄は老若男女誰もが口ずさめることが出来た。知らず知らずに頭に擦り込まれているから、「フジのタカネにフル雪も〜」なんて子どもが唄って、大人に頭をはたかれるなんてこともよくあった。そう、歌謡曲はみんなの唄、ヒット曲は正に時代の唄だった。唄は世につれ、世は唄につれだ。一回目の東京オリンピックから数年後の記憶がある。

また本家の話だ。本家には、狭いが応接間と称している六畳ほどの部屋があった。照明はタコ足のような枝先に電球のついたシャンデリア擬き、人工皮革のごっついソファが風呂屋にあったような椅子のマッサージ機の横に並び、壁際のガラス付き本棚にはおそらく買われて以来一度も開かれたことがない30巻ほどの英語の百科事典が高価なインテリアとして鎮座していた。そこに昭和40年代半ば頃、新たなインテリアが加わる。足が四本ついてまだスピーカーが分かれていない箱形のステレオだ。「おっちゃん家がステレオ買わはったで」、その情報が入ると東京両国大正生まれの母を持つ私は、おそらくモガ…モダンガールの末裔であった母のコレクション、即ちドヴォルザークやヨハン・シュトラウスやらのSPレコードを抱え早速駆け付けた。うちにはレコードはあったものの、基本的に貧乏でそれを鳴らす蓄音機さえなかったのだ。で、存分に聞かせてもらった。

その時、驚いたのは、おっちゃん家には、シングルレコード一枚しかなかったことだ。…燦然と輝くぴんからトリオ『女のみち』。朝起きては『女のみち』。酒が入れば勿論『女のみち』。

『女のみち』は、おっちゃん家では一日に何回も大音量でかけられた。「ええなあ、人生やなあ」、
「やっぱりステレオの音はちゃうなあ」、時に口ずさみながらおっちゃんは、大満足だった。賭け事
大好きで、熱くなればちゃぶ台ひっくり返す。でも腹の中には何もない、私はそんなおっちゃんが
好きだった。で、そんなおっちゃんたちがこの国には沢山いたのだろう。

彼らが支持した『女のみち』は、とてつもない大ヒット曲となった。ちょうど唄本を捲りながらの
カラオケがスナックなどで普及しだした頃だ。シングル売り上げ400万枚、今もその数は、子門真人
の『およげ！たいやきくん』に次いで歴代2位だ。あの頃を生きた者・老若男女…好き嫌いにかかわ
らず、あのイントロがかかれば思わず口ずさんでしまうだろう。そんなヒット曲。

ところが今、何故か、そんな曲がなくなってしまった。世の中が変わってしまったのか。

令和元年、大晦日。私は見ていなかったのだが、国民的番組NHK『紅白歌合戦』で奇妙なことが
起こった。平成元年6月、52歳で没したはずの美空ひばりさんが新曲を発表したのだと云う。

この原稿を書くにあたってその歌と映像をネットで確かめてみたが、はっきり云って酷いものだ
た。ひばりさんが亡くなった頃、私・天邪鬼はドキュメンタリーの中堅放送作家で、『追悼美空ひば
りスペシャル』に始まり、毎年命日ごとに二時間ほどのスペシャルを各局で担当させていただいた。

戦後すぐ蜜柑箱の上に乗って唄いだした少女、美空ひばりの物語をその唄と共に何度も書いたの
だ。何もかもなくした敗戦から奇跡の復興まで、戦後日本の人びとの心に寄り添い、数知れぬヒット
曲を生み出した歌謡界の女王…、実は正直に云うと私自身は彼女に熱狂した世代ではなく、若い頃は
フォークソング・ブームの恩恵を受け、旧世代の代表美空ひばりには否定的だった。

弟たちとヤクザの関係で、昭和48年、全国の市民会館やホールから締め出され、10年連続でトリ
を務めていた紅白歌合戦からも辞退させられた国を挙げての大バッシングの時も、10代だった私は
締め出す側の味方だった。何しろ、昭和39年、わずか2年で破局した小林旭との離婚記者会見の
時、本人の隣には山口組三代目田岡一雄組長が座っていたのだ。しかも、そこに駆け付けた記者たち
も何の抵抗もなく組長に質問したりしている。

今なら考えられない光景だ。芸能・興行はヤクザの仕事と云う古くからのしきたりが、彼女の周辺
にはまだ生きていたのだ。そんな前近代的な演歌歌手が日本の代表でいいのか…、フォークにかぶれ
た若き天邪鬼は正に駆逐すべく旧世代の代表として彼女を見ていた。その評価が一転したのが、彼女
の死後、スペシャル番組を何本も担当した時だった。ウマイのだ。とにかく唄がウマイのだ。

特に、ジャズのスタンダード曲なんか唄わせたら、何故アメリカデビューしなかった？と思わせ
るほどいい。彼女の唄う『スターダスト』を聞いたときは鳥肌がたち、知らず知らずに涙ぐんでい
た。彼女は正に歌姫であり、女王であり、不死鳥だったのだ。そんな彼女が新曲？

紅白で歌われたと云うのは、彼女をコンピュータ・グラフィックで再現し、その声までもコンピュータで再現したものだった。確かに似ている。が、鳥肌は立たない。だって血の通っていない作り物だから。深みも伸びもない。要するに機械を使ったモノマネだ。それを新曲とは…。ひばりさんの御子息が会場で聞きながら泣いていたから著作権関係はクリアしているのだろう。だが、天邪鬼にはとにかく話題作り、視聴率狙いと云う仕掛けの匂いがプンプンして、女王を何てことに使うんだと云う憤りを感じるのみであった。その思いが確信に変わったのが、その新曲の作詞家の名と、そしてその作詞家ご本人が会場にいる映像を見た時だった。

秋元康。放送作家にしてプロデューサー、そして作詞家。ひばり最後の曲、『川の流れのように』を書いたのも彼だ。最近『川の流れのように』は、遂にひばり全盛の頃の大ヒット曲『柔』を抜き、ひばり最大のシングル売り上げになったと云う。だが、私・天邪鬼はこの『川の流れのように』を認めない。詞の内容なんてほとんどない。死を予感させる瀕死のひばりが歌ったからこそ、この曲はヒットしたのだ。別の歌手が歌っていたら見向きもされなかったろう。実際、ひばりはこの曲の発売後、5ヶ月後に亡くなり、この曲は彼女の最後のシングル曲となった。

晩年の曲としては、病み上りのひばりに勇気を与えようと敢えて歌いづらい高音を駆使した、演歌の巨匠、船村徹作曲、星野哲郎作詞の『みだれ髪』の方が名曲だし、家族の愛を美しい日本語と風景で浮かび上がらせる小椋佳作詞作曲の『愛燦々』の方が心に染みる。秋元氏は、『川の流れのように』までは一曲もひばりに唄を提供していない。つまり言葉は悪いがハイエナのように瀕死の不死鳥に近づき、ひばりの生前最後の楽曲を提供したのだ。ひばり自身もこの曲を気に入っていたようだが、やはり仕掛けの匂いがプンプンする。図らずも秋元氏自身はあるテレビ番組でこう云っている。

「自分は天才でもアーティストでも芸術家でもない。ピカソになりたい広告代理店マン…」だと。

そう、正に彼は広告代理店、作品の中身よりもまず売れることを考える。そして、そんな彼が大成したからこそ、この国から老若男女が唄える流行歌が消えたと考えられるのだ。秋元の初期の成功としては、昭和60年頃、番組で素人の女子大生を集めてアイドル化した『おニャン子クラブ』だろう。秋元氏は、彼女らの唄のほとんどを作詞している。その延長線上にあるのが、平成17年、「会いに行けるアイドル」を標榜し、秋葉原で素人女子を集め立ち上げた『AKB48』だ。

『AKB』は平成22年には、出す曲、出す曲100万枚の売り上げを誇るようになり、常にヒットランキングの上位を占めるようになった。秋元氏は彼女たちの楽曲の作詞を独占している。私は、若者たちを夢中にさせたアイドル『AKB』の娘たちにも、その曲にも別に文句はない。

問題は、その売り方だ。『AKB商法』と云うものがある。『握手券商法』とも云われるが、要するに「ファンにCDを複数枚買わせようとするもの」である。具体的にどうするのか。

一つは、CDに握手券と称するものを入れ、それを持って行くと実際に握手が出来ると云うものだ。つまりファンは曲が目当てでなく、アイドルと握手したいから、CDを買う者も当然ながら現れる。これより悪質なのが、CD購入特典としてメンバーの生写真をつけると云う方法がある。ま、それ自体に問題があるようには思えないが、この方法の裏にはカラクリがある。実は、その写真は、メンバーの中からランダムに入れられているのだ。つまり、自分の好きなメンバーでなければ、その娘の写真が当たるまで同じCDを何枚も買うことになる。

さらに、悪質なのがCDに投票券を一枚封入する方法だ。『AKB48』と云いながら彼女たちには表の48人だけでなく、補欠のような存在もいる。さらに、センターで唄うか、後ろのダンサー扱いになるか、1年に一度くらいある「選抜総選挙」の人気投票で決まる。そうすると、自分の好きなメンバーをいい位置につける為に、ファンは投票券を得る為にまた何枚も同じCDを買うことになる。事実、ある時のセンター、中心で唄うトップスターには、常に中国から大量の得票があつたと云う。中国の大金持ちがCDを爆買いして大量投票したのだ。

中国の大金持ちは置いておいて、基本的に彼女たちのファンと云えば若者…、小中高生、さらにはお宅系の成人…、つまりお金をあまり持っていない者たちだ。その彼らが自らが推すアイドルのために、1枚2,000円程度のCDを何枚も買う。それが原因で恐喝やら万引きも起こっていたと云うし、何十枚ものCDが不法投棄され問題になったこともある。とは云え、ヒットランキングはCDの売り上げ枚数で決まるから、『AKB』の楽曲は、とてつもない枚数を売り上げ、ヒット曲となる。

そりゃ、一人が何枚も何十枚も同じCDを買えば、ランキングは上がる。

こうして大人たちの知らないところでヒット曲は生まれ、そして、彼女ら曲の全てを作詞している秋元氏の元に膨大な著作権料が入る。これが、日本の代表的なプロデューサーと云われる秋元氏のカラクリだ。情けないことは、選挙権を金で買うような時代に逆行する方法に、日本の芸能界、芸能ジャーナリズム、法曹界は何も云わないことだ。個人的に糾弾している人はいる。だが、それが世の大勢とはならない。人気者になってしまえば、テレビで云えば、視聴率と云う伝家の宝刀を手にする事になり、ちょっとした不倫でタレントをつるし上げるワイドショーも芸能評論家も、『AKB』、即ち秋元グループには手を出せなくなるのだ。それどころか、マスコミは秋元氏を希代の作詞家、プロデューサーとして一流の文化人のように持ち上げている。自らの權威の為には誰とでも近づく秋元氏は、安倍晋三首相とも親しくなり、何と『2020東京オリンピック』の演出者として手を挙げたと云う。全く勘弁してくれだ。

昔、江戸後期から明治、さらには昭和の敗戦後の日本を牽引した近江商人たちの教えに、「三方よし」と云う考え方があった。三方、即ち、「売り手よし、買い手よし、世間よし」…、売る方も買う方も得し、さらに世間の為になる商売こそが理想としたのだ。

『AKB商法』は、正に売り手だけが得するシステムだ。それほどの才能や美貌もない儘にグループの一員となった娘の多くはおそらく勘違いした人生を送ることになるだろうし、何枚もの同じCDを買わされるファンも勿論不幸だろう。得するのは売り手のみだ。『AKB商法』と云うシステムを開発し、大金持ちの一流文化人となった秋元氏。そんな彼が令和元年の紅白歌合戦に仕掛けた美空ひばり氏の新曲『あれから』。

会場では、お世話になった歌手やら…ご子息やら…おそらくひばり氏を聞いて育ったおばちゃんやらが涙を流し、感動していた。“全く勘弁してくれ”だ。秋元氏の作詞によると、彼女が死んだ時から、彼女はずっとファンやら人々を見守ってきたのだと云う。実に空疎なお涙頂戴ストーリーだ。ひばり氏の唄にあった心を揺り動かす感動には程遠い。会場の涙は、生前のひばり氏との濃厚な思い出が誘発したに過ぎない。昭和の歌姫、歌謡界の女王、永遠の不死鳥をこんな代理店的なイベント扱いして失礼だとは思わないのか？ もし、ひばり氏自身があの映像と唄を見たら、きっと激怒するだろう。かくして、老若男女誰もが唄える流行歌は消え去り、若者は若者、爺さん婆さんたちには爺さん婆さん用の唄ばかりとなった。そして、街に溢れていた流行歌も消えた。

最近、天邪鬼と称している私の方がまともで、世の中の方がどこか変によじれているのではないかと思うのだが…、如何だろうか？ 機械から自分の金を引き出すのに手数料がかかったり、売るだけ売っておいて煙草を吸うところをなくしたり、芸能人に倫理を求めたり…。

芸能者と云うのは、稲を育てたり、魚を獲ったり、タクシーの運転したり、額に汗して働くまともな仕事の枠外の者、つまり倫理とは無縁の世界に生きる者である。そりゃ不倫もするし、少々の暴力もあるだろう。極端に云えば同じような立場のヤクザとも付き合う。だから、彼らは真面目な人には思いつかない、お笑いや美しさを生み出すのだ。何もかも極端に清潔と平等を求め、その裏では視聴率と云う数字に絡め取られ、NHKまでも代理店的な空虚なイベントに死するひばりを担ぎ出し、踊らせる。あの前のオリンピックのカラーテレビの感動、インパクトはもうきっと味わえない。

昭和から平成…そして令和と云う時代が変遷していくうちに、テレビ文化は爛熟し、そしてもう終焉を迎えるのであろう。さて、これからどんな時代が来るのだろうか。少なくとも音楽業界では、もうCDの時代ではなく、ネット配信からスマホに取り入れる時代となった。もう『AKB商法』は通用しないだろう。新しい令和の時代の『女のみち』は生まれるのだろうか？

ネット社会では、メジャー、マスコミの手を借りることなく、大ヒット曲も生まれている。

例えば、紅白出演を拒否した米津玄師、彼は『L e m o n』、小学生による『パプリカ』など、新しい時代のヒットを生み出している。私には、好みではないが、少なくとも楽曲の力だけで『AKB商法』に打ち勝ったのは確かだ。こんなヒット曲が生まれる限り、まだこの国には見込みがあると考えられる。さて、未来のこの国の街にはどんな曲が流れるのだろうか？